

原朗さん証言（14 歳、中学校 2 年生、千葉市道場南町）

## 1 はじめに

昨年（2008 年）、私は 77 歳になり喜寿を迎えた。こんなに長生きするとは思ってもみなかった。満州事変（1931 年）の年に生まれ、現在、年金の恩恵に浴して、平穏な生活ができて幸いだと思う。

これまでの過去を振り返ると、1945 年の第 2 次世界大戦の終結（日本の敗戦）は日本の一大転換の時にあたり、私の人生にとっても同様であった。耐乏生活と戦争の非常時や軍国主義から開放された節目にあたり、それを機に自由と民主主義への移行等、めまぐるしい変化があったからである。戦時の体験者が、徐々に世を去りつつある昨今、戦争の愚を繰り返さないため、その異常な体験を後世に伝えることは、意味ある大事なことと思う。この体験集が広く読まれ、その内容が語り継がれることを願っている。

## 2 私の体験した戦時の学生時代

第 2 次世界大戦の終戦時、私は中学生（県立千葉工業学校電気科）の 1 人だった。戦前・戦中の教育は、非常時の軍国主義のもと、入学後、短期間で「軍人勅諭」と「戦陣訓」の暗記を強制され、競って覚えようとした。「国には忠誠、お上（天皇の名において上司、上官、先生等）には絶対服従」と教えられ、洗脳される。中学校内では、先生が権力を握り、スパルタ式のビンタ教育が当たり前。学校配属将校の指導のもと、将来、厳しい軍隊生活に入隊を前提の準備教育。当時は戦時の食料難、物資や情報の不足と統制、国家の仕組みと方針に強制的に組み込まれる。夜間の空襲から睡眠不足になった大人たちは、欲求不満の捌け口として、抵抗できない学生や子供の弱さにつけこみ、教育と躰（しつけ）の名のもとに、サデイスチックに暴力をふるったのではないか。我慢と忍耐の教育なのだろうか。

学生時代、クラスやグループの誰かが規律違反などを犯すと、連体責任として 2 列に並ばせられて、二人がお互いの頬をはれあがるまで平手でなぐりあう体罰は、なんのためか分からない。朝礼時に、ある学生を「鬼殺し」とあだ名の教頭が繰り返し突き倒したみせしめの蛮行は、教育者の風上にも置けない異常性格者の恥ずべき行為にも思えた。

軍隊で既述のようなしごきを受けた日本兵が、中国や東南アジアの国々に進駐した。その地で現地の人々に蛮行をはたらき、日本の悪名を残して残念である。一部の世界に知られた高尚な日本独特の武士道精神はいずこに消えてしまったのだろうか。

「生きて捕囚の辱めを受けず」と戦場で自殺をひいた戦陣訓の作成責任者東条英機は A 級戦犯として処刑された。数百万の人々を死に追いやった戦争の最高責任者としては当然の報いである。不幸な戦没者の霊を悼むところである。

かずかずの思い出したくない戦争中の体験のなかで、多少ともその後に役立つ健康法がひとつある。中学生になった時、紐が両側についたタワシを渡される。真冬でも朝礼時、上半身裸になり肌をマッサージした荒業は、好かれないう行事ではあったが、風邪の防止

のためと知る。栄養の十分でなかった時代を生き抜く知恵と理解する。その健康法にならない後年の一時期、冷水摩擦をして 冬を過ごし、風邪をひかないですんだことがある。

平和な現在から当時を回顧すると、まさに異常な行動が当たり前の時代で、方針や指導に合わせるのを義務とした仕組み。個人の自由な考えは全く無視された。晩年にいたって思えば、そのような過酷な教育を受けたおかげか、その後の人生で遭遇する問題に耐える忍耐と要領をかなり身につけたのではないだろうか。

戦争中の学生生活で楽しかった思い出は、春秋の農繁期に学徒動員の一環として、出征農家の農作業の手伝いに行った時。農作業が面白のではなく、午前と午後におやつをいただけたほか、昼食に白米のご飯がたべられる楽しみであった。都会では食料が配給制になっており、米不足からコウリヤンや大豆、さつまいも（沖縄百号の水っぽいくて大きい芋）などが配給になる。田舎の農家では自家生産のお米を食べ、犬猫も残りご飯を食べていて驚く。当時、腹がへると雑草でも食べられれば食べたく思うほど飢えていたのだ。父の経営する会社は田舎から「母ちゃん農業」で出稼ぎに来ている従業員がいた。農繁期の土・日曜日の学校休みに手伝いに行くと、帰りに自転車の荷台に山ほどの野菜などの農産物をお土産にいただいた。食料難時代にあっては、食料は宝物のよう。農業が楽しくなり、本気で百姓になりたいと思った。食料不足の時代は、農業が最高の人気業種だった。

学校では戦時の一時期、授業は半日で午後は実習、伐採、炭焼き、学校菜園の仕事など、いろいろと動員され働かせられた。その合間に、出征兵士や学徒を駅に送る。空襲があれば防空壕に避難し、上空を見上げて敵機の飛来の見物。変化ある学生生活を体験した。終戦直後の数年、クラス担任になられた浅井吉弥先生は、人格者だった。卒業までの数年間、愛情ある厳しさと誠意をもって教育してくださったのが、救いだった。卒業後、先生が90歳代で亡くなるまで、クラス会でお会いし、戦時の暗い学生生活を帳消しにしてくださった。軍国主義にそまっていた日本にも、尊敬できる恩師がおられたのである。

3 家庭生活 私は、家庭にあって祖父母、父母、姉（兄弟6人）の計10人の大家族の中で暮らしていた。家庭内での躰（しつけ）は厳しく、そこで、人生の生き方の基本を植えつけられる。兄弟喧嘩から、人付き合いのルールや要領を学ぶ。一人や二人の核家族にはない家族の営みや家訓を学ぶ。居間には仏壇と神棚があり、日々、宗教的な雰囲気がある。戦争が終わり、家庭内での宗教的行事は希薄になる。若者たちは、現代の日本では無宗教が普通。お金中心の幸せ追求から、不公平感や欲求不満が生じて問題が起きる。若い時に、質素でシンプルな生活を体験したのは、その後の人生に良かったのではないだろうか。

父は燃料（練炭・棒炭）加工の小さな会社を経営し、家族を支えた。食料をはじめ生活必需品は配給制のため、それらの調達は大変。だが、父の事業は景気が良く、購入希望者に整理券を配る長蛇の列ができるほどだった。おかげで一般の平均的生活と比較すれ

ば、幸いにも暮らしは比較的良かったと思う。

お金があれば闇（ヤミ）で物資の調達が可能だったからである。真面目に生きようとすれば、栄養失調になりかねない。

当時の出産は、ほとんどすべて産婆が家に来て、赤ん坊をとりあげた。タライにお湯を満たし、生まれた子が産声をあげると安堵した。国は「富国強兵」を国策とし、男は兵隊、女は銃後の守りとして多産を奨励した。どこも、兄弟 姉妹の多い世代だった。だが、大家族であると食事時が込み合い、黙って急いで食べることをせかされ食事を味会う余裕はない。将来の軍隊生活での早食いの練習にはなったかも。もっとも、シンプルな食事が普通でご馳走は特別の日しかなかった。飽食の核家族とは対照的な家庭の風景である。

4 当時の防衛事情と動き その当時、千葉市は軍都として周囲にいくつかの軍関係の基地や施設があった。鉄道第一連隊、歩兵学校、高射砲学校、戦車学校、気球連隊など、軍都として知られていた。終戦の前年、サイパン島の玉砕から連合国の本土爆撃が本格的に始まる。いつかは、人口約 10 万人の県都千葉市も空襲に遭うのではないかと恐れ、心配していた。

満州事変、日華事変を経て、真珠湾の奇襲攻撃が 1941 年 12 月 8 日に起こり、戦時に突入した。戦時防衛体制として隣組が組織される。大政翼賛会なる全国組織が形成され、国体の護持と軍国主義に協力するようお膳立てがなされる。治安維持法により国策に合わない言動は容赦なく取り締まりの対象になる。市民の恐怖政治は憲兵と警察で維持される。

赤紙 1 枚で成人男子は招集され、前線に送られた。お国のために戦死すれば靖国神社に祀られるという触れ込みで、兵士の命が国の盾となる。天皇のために命を捧げることが、最大の荣誉とみなされる。事実は戦場で戦死した兵隊より、軍部のまずい戦略と物資補給を断たれた、南方のジャングルに送られた兵士は、病死や餓死で犬死したのが大多数である。遺骨箱が遺族に渡されても実態は遺骨に似せた物を入れてあり空しい。事実は、戦地やジャングルでの遺骨回収は事実上困難だったからである。

内地では沖縄の戦争の悲劇のほか、グアムやサイパンの玉砕から、米軍の飛行基地ができた。1944 年末から B29 爆撃機の爆弾や焼夷弾攻撃が始まる。

迎え撃つ高射砲やゼロ戦闘機では 1 万メートルの高度を飛ぶ敵機にとどかない。私は、ジェット推進（B29 が本土上空に飛来した時、速度を増すため、ボディの下部からロケット状の噴射装置）を見た。音レーダーを装備した米国の最新航空機は、日本のプロペラ機の敵ではない。開戦数年にして大量の飛行機、軍艦などを生産した米国などの連合軍は、破壊されて物資の乏しい日本軍とでは勝負にならない。日本の軍部は、「井戸の中の蛙」で世界を知らず、時代遅れの「竹やり戦術」を強いて笑止千万だった。兵士は日露戦争で使用した 38 銃（1938 年製）を持たされ、連発式銃をもつ米兵に対し、カミカゼ攻撃をしかける。戦地では玉砕戦法で挑み、その悲報のニュースに涙する。本土の防衛

は防空頭巾（ずきん）、防火用水、バケツリレー、火消しはたき、窓ガラスの紙張り（十字、X状）に頼る心細さでは戦争に勝てるあてもない。「一億玉砕」のスローガンと精神力、神頼みの防衛では近代戦には勝てなかったのである。

## 5 千葉の空襲と戦災

戦後に知ったが、日華事変で日本が重慶の無差別爆撃をしたのが前例となり、米軍の都市無差別攻撃が始まったとのこと。千葉市の第1回の空襲は6月10日午前7時45分から1分間の攻撃だった（米軍資料）。B29爆撃機27機が飛来し、軍事工場と市街地の一部の爆弾攻撃であったが、工場には被害なし（米軍資料）とある一方、工場の一部被害が千葉市では記録。住宅地にも戦闘機P51による機銃掃射（道場北町ほか）があった。目標からはずれた中心街（新宿・富士見・新田・新町等）にあった千葉師範学校女子部、県立千葉高等女学校、機関庫（現在のJR千葉駅近辺）から京成千葉駅（ツインビル近辺）に至る線路に爆弾が多数落下した。大音響とともに直径10メートル・深さ数メートルの大穴が京成電車の線路上にいくつもあく。落下地点に近い蛸壺防空壕に避難した関東中学校（西千葉の現千葉大の西側にあった）学生の一人が即死しているのを目撃した。頭の上半分が吹き飛ばされ、薄黄色の豆腐状の脳がむき出ししていた。学生カバンを背負った死体のあわれな姿が脳裏に焼きつく。その時、その場にたまたま居あわせ、彼の人生は瞬間的に終わりとなる運命の悲劇であった。戦争の惨事を見慣れると、次第に感性が麻痺し、無感動になり恐ろしい。その空襲の被害は、市役所の調査によれば死傷者391名、被災戸数415戸だった。約1カ月後の七夕空襲は、第2回目の千葉市の中心住宅地への無差別焼夷弾攻撃の空襲。その深夜の夜襲で、わが家は戦災に遭い事態は一変した。その夜、空襲警報で庭に作った防空壕にひとまず避難した。家の前の道路に多数の避難民が郊外に逃げてゆく足音に異常を感じる。私もリヤカーに多少の荷物をのせて逃げる。すでに焼夷弾が落ち、あたりは明るい。ふと隣家の軒先に立つ盲目の祖父が目にとまる。数珠を腕に合掌していた。とっさに私が手をひき、東方の農事試験場（現知事公舎）の近くに避難する。朝になり、ひもじかったら近くの焼け残った店で、ふかしたジャガイモをふるまわれ、ひとついただく。その好意が忘れられない。

朝になり家の焼け跡に戻ると、石炭の原料が燃え、石油缶の米が炭になっており、うらめしかった。名門原家の虫食いの家系図の保存場所を知っていたが、持ち出しそこねて焼けたのが今になってかけがえがないもので、惜しまれる。

1週間後に疎開を計画し、準備していた物資はすべて消失され、生活のどん底におちいった。終戦直前であり、首都東京を始め全国各地で大被害が相次ぐ。

敗戦直前の政府は無策で混乱状態にあったのか、なにもしてくれない。

戦争の被害のおかげで、一夜あけてホームレス。親戚縁者の善意にすぎるほか、他人からのボランティアの助けを期待できなかった。幸い家族はだれも無傷だったのが不幸中の幸い。当時、私は幼かったので、さほど深刻な不安や悩みを感じなかったが、一家を支

える父母の苦労は大変だったのではないだろうか。

爆撃機の射手は多分、ゲーム感覚で焼夷弾発射のボタンを押し、職務を全うしたと思うたであろう。その結果、多数の家が消失し、死傷者が出るのを知りながら、罪悪感を覚えることなく、英雄きどりで無事に基地に戻れたことを喜び、誇りに思ったことだろう。

「一人を殺すと殺人。多数を殺せば英雄」とは、戦争の理解しがたい真実である。

なお、千葉市戦災の記録によると、B29爆撃機129機がテニアン島から飛び立ち、7日午前1時39分から3時5分まで焼夷弾889.5トンによる攻撃をした(米軍資料による)。その結果、「中心市街の大部分(7割)を焼きつくし、死の町と化する惨状を呈し・・・死傷者1,204名、被災戸数9,489戸」と、千葉市空襲写真記録(千葉市市民課、平成10年7月発行)に記録されている。この事実から東京大空襲は類焼で広がり、消防機能がなくなり、火災による退路を絶たれた人々の悲劇で、千葉市の場合は郊外に逃げて比較的少数の死者ですんだものと言える。

6 戦争から平和へ 海に囲まれ、徳川時代の日本は、幕府の政策により比較的平和な時代を過し天下泰平だった。各種の芸術、文化の華が開き、読み書きのできる人々が海に囲まれた安全な日本諸島に暮らす。明治の文明開化から時代は変わり、富国強兵の国策と海外との交易を奨励するようになる。1億の民がせまい日本列島に居住し、海外移民もはじまった。

日本も当初は自ら朝鮮や台湾などの植民地を有していたにもかかわらず、アジアを欧米の植民地から解放するという口実で、アジアの兄貴分として振舞う。

だが、情報や物資の不足、困窮、戦力と士気の低下、原爆の被害を受け、開闢以来、はじめて降伏するはめに立ち至る。歴史で教えられていた神風は吹かなかった。国敗れて、戦勝国からの慈悲によりララ物資などの食料援助等を頂戴し、復興を助けられ、自由と民主主義を導入されて国が新しく再建された。「負けるが勝ち」とは、戦後の日本やドイツの経済的復興をみれば明らかと言えるのではないか。

村上春樹氏がエルサレム賞の受賞スピーチ(「文芸春秋」2009年3月号に掲載)で、「卵のような脆弱な個人と、壁のような戦争のシステムによりもたらされる無差別の大量死が戦争」との比喻で演説した。これは2008年12月にイスラエルのガザ攻撃があり犠牲者が生じ、イスラエルとパレスチナの衝突の現実を暗示したもの。文学者の彼がその機会をとらえ、イスラエル首相やユダヤの要人たちの前で堂々と語り頼もしい。アウシュビッツの悲劇を体験したユダヤ人の首都エルサレムで、2009年1月に開催の公式行事で演説。苦虫のネタニヤフ首相などを除き、参列者多数の共感を得たのだった。

戦争は個人の意思ではどうにもならない運命のいたずらかもしれないが、あきらめずにねばり強く後世の平和の実現に努めるのが、生きている人の務めではないだろうか。

戦争の悲劇は、これまで世界中の多くの人々が体験してきた。不幸なことに平和な時代の現在でも、世界でいまだにテロや戦乱が繰り返され、争いが絶えない。人間とは英知あ

る動物ではあるが、愚かな野獣の一面もあわせ持つ。歴史に学び、平和を求めて許しあい、愛し合って人類の文化を築きたく、お互い が小さな貢献をして生きて欲しい。

平和憲法は世界の理想ゆえ、守りたい。月間雑誌「サライ」(2006年8月17日号)の「天皇の無私が、戦後の日本を築いた」(半藤一利・作家、元文芸集住編集長)によれば、昭和天皇がマッカーサー司令官を11回も訪問して、新憲法 下での選挙や安全保障、講和問題、食料援助など、肝心要のことを話し、マッカーサーはそれをことごとく採用した。・・・だから、戦後日本という機軸は、 マッカーサーと天皇の合作だと思う。私は、その交渉で不戦の9条が実現したと推論する。この憲法は、敗戦の教訓からの実現で世界の理想の憲法である。

「国敗れて山河あり」といわれるが、戦争が終わり65年近く平和を享受し てきた。経済的にも戦後の一時期を除き、恵まれた生活を送れた。戦争で生き残れた私たちにとり、戦後の人生は余禄の生涯にちがいない。生き残れて誠に ありがたいことだった。

激動の半世紀は、戦争と平和、戦後の窮乏と混乱、一夜にして軍国主義から 民主主義への転換、貧困から豊穡、破壊から建設への歴史と人生の現実ドラマだった。私たち昭和一桁から二桁の世代は、ふたつの相反する極地を経験した。あの悲惨な戦争や、戦後の欠乏・混乱の時代を知っているからこそ、現在の自由のありがたみが分かるといえよう。

7 平和への結びの言葉 私はこれまで、聖書に出会い、人生の送り方、人との付き合い方を学んできた。

聖書には、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」、「剣をとる者はみな、剣により滅びる」、「平和をつくり出す人たちは幸いである。彼らは神の子と呼ばれ るであろう」というキリストの言葉がある。まさに至言である。(「平和の今戦時を回想」、千葉市中央区亀岡町在住2009年5月21日)